

マテオ・リッチ書簡集(『利瑪竇書信集』)訳注稿(四)

安部 力

はじめに

本訳稿は、一六世紀(明朝末期)に始まる東アジア地域へのカトリック・キリスト教宣教師、特にイエズス会士の活動において、大きな先駆的役割を果たしたマテオ・リッチ(中国名は利瑪竇、イタリア人、1552~1610)が残した書簡に関する試訳(1)の続編である。

訳注作業の目的・意図などは既に「同訳注稿(一)」「冒頭において説明しているが(2)、本作業が念頭に置いている「典札問題の内実」に関して、新居洋子氏の『イエズス会士と普通の帝国 在華宣教師による文明の翻訳』(名古屋大学出版会、2017年)が、大変示唆に富むので、是非参照されたい。

【凡例】

・底本：『利瑪竇書信集(上)(下)』(『利瑪竇全集』(3)(4)、羅漁訳、(台北)光啓文化事業、1986(中華民國75)年)

・リッチを始めとするヨーロッパ人神父などの人名表記については、これまでの研究に於いても一定していない。それは、中国語音を元にした漢字訳表記が揺れていることから分かるが、どの言語(ラテン語かイタリア語かなど)の読み・表記を採用するかにも関わっており、本訳稿でも表記が揺れていることがある点にご承知おき頂きたい。(例えば、矢沢本ではリッチは「マッテオ」であり、平川本では「マッテオ」となっている。更に後藤基巳氏や柴田篤氏の『天主実義』では「マテオ」となっている。本訳稿では、主要な人物名表記について、確認できる範囲では原則として『イエズス会の歴史』(ウィリアム・バンガート著、上智大学中世思想研究所監修、原書房、2004年)の人名表記(ヴァリニャーノ、アクウアヴィヴァなど)に従うこととした。(但し、バンガートはリッチの漢名表記を「李瑪竇」(同書194頁)としているが、「利」と「李」は普通であるため、ここでは問わない)

【主要参考文献】

- ・『マテオ・リッチ伝1~3』(平川祐弘著、1・東洋文庫141、1969年、2・東洋文庫624、1997年、3・東洋文庫627、1997年、平凡社)
- ・『中国キリスト教布教史1・2』(『大航海時代叢書』第3期 第8~9巻所収、マテオ・リッチ著、川名公平訳、1982年、岩波書店)
- ・『イエズス会士中国書簡集1~6』(矢沢利彦編訳、1康熙編：東洋文庫175、1970年、2雍正編：東洋文庫190・1971年、3乾隆編：東洋文庫210・1972年、4社会編：東洋文庫230・1973年、5紀行編：東洋文庫251・1974年、6信仰編：東洋文庫263・1974年、平凡社)
- ・『中国の布教と迫害—イエズス会士書簡集』(矢沢利彦編訳、東洋文庫370、平凡社、1980年)
- ・『天主実義』(柴田篤著、東洋文庫728、平凡社、2004年)
- ・『利瑪竇伝』(羅光著、光啓出版社、1960年)
- ・『在華耶穌会士列伝及書目』(費頼之(Aloys Pfister)著、馮承鈞訳、中華書局出版、1995年)
- ・『中国天主教史人物伝』(方豪著、台中光啓出版社、天主教上海教区光啓出版社発行、2003年)
- ・『中国キリスト教布教史1・2』(マッテオ・リッチ著、川名公平訳、矢沢利彦注、平川祐弘解説。大航海時代叢書第2期8・9、岩波書店、1993年)

【注】

- (1) 『マテオ・リッチ書簡集』(『利瑪竇書信集』) 訳注稿(一) 『北九州工業高等専門学校研究報告』第50号、平成二十九年。「(一)」「(二)」「(三)」は、それぞれ51号、52号に掲載している。その他、本件に先行するマテオ・リッチに関するテーマを扱った訳者の成果としては、『天学初函』における『職方外紀』の位置が示すこと(『哲学資源としての中国思想—吉田公平教授退休記念論集—』所収、吉田公平教授退休記念論集刊行会編著、研文出版、2013年3月)があり、その展開例を台湾に於いて見いだそうとした成果が以下の一連の報告群である。「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(一)—祖先祭祀をめぐる問題—」(『北九州工業高等専門学校研究報告』第41号、平成二〇年、

「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(二)——「天后聖母」について——」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 42 号、平成二十一年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(三)——現地調査における現状と課題——」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 45 号、平成二十四年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(四)——図・像を中心に(一)——」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 48 号、平成二十七年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(五)——建築様式及び装飾備品を中心に(一)——」『北九州工業高等専門学校研究報告』第 49 号、平成二十八年)。また、前稿作成後、東洋文庫蔵「Opera storiche del P. Matteo Ricci S.I.」(Pietro Tacchi Venturi.) を目にするのが出来、本書簡集に関連する内容の確認を行った。(この点については、既に前掲『キリスト教布教史』623 頁に言及がある。)

(2) 2019 年度まで、科学研究費補助金(基盤 C)の助成を受け、課題名「16 世紀来華イエズス会士による異文化対応の諸相——「利瑪竇的規矩」の内実と展開——」による研究を進めたが、この課題名にある「利瑪竇的規矩」の内実を探る一環として、本訳稿作業が位置づけられている。なお、「利瑪竇的規矩」は現在の台湾などでは「利瑪竇規矩」と「的」が省略されることもあるが、本稿では康熙帝の文書に従い「利瑪竇的規矩」としている。

『マテオ・リッチ書簡集』(訳注稿) 本文

【和訳】

六 (リッチより) ローマのアクアヴィヴァ総会長神父へ

一五八五年十月二十日 肇慶にて

イエス マリア キリストの内なるきわめて尊敬すべき神父へ

願わくば主の恵みが私達の上に満たされん事を。

昨年と同じような、私たちが中国に入って建造した邸宅のことなどを報告する手紙を総会長神父様には書かないことになりました。それは、管区長であるヴァリニャーノ神父が既にあなたに報告を行っているからです。ですので、我々は一再ならずヴァリニャーノ神父に手紙を送り、そこからあなたに改めて伝えて頂くと考えました。現在、我々が得たのは、何日か以内に、ポルトガルに戻るヨ-

ロッパ船が、その出発前にマラッカに到着するとの情報です。もし、私の手紙がこの船に預けられるのであれば、一年を経ずに、総会長神父様はインド布教区の状況について知ることができるでしょう。そうでなければ神に任せるしかありません。

昨年は、幸いにもマカオ会院の院長であるフランシス・カブラル神父に我々の小さな会堂を視察頂きました。これは、我々の活動がマカオ会院の管轄下にあるからですが、カブラル神父は大変満足されていました。カブラル神父の意義深いお話は、特に異教徒をキリスト教に帰依させる点において、裨益されることが大でした。この方面においてカブラル神父はかつて日本で長年布教活動をした経験があったからです。我々は神父に、入教を強く望んでいる二人のうち一人に洗礼を施したので、祝福を与えて欲しい、と要請しました。それからまた、神父様には、以前お送りした中国語文の『天主実録』と合わせて、中国語文の『天主経』『聖母経』と『十誡』をお送りしました。

中国では、新しい本を出版する際、当地の高級官僚や名士に序文を書いてもらい、著者に敬意を払い、書物の内容に褒め言葉を贈ってもらおうという習慣があります。これはヨーロッパと全く同じです。そこで、我々は当地の統治者であり、我々の庇護者でもある嶺西道・王泮氏(彼は、去年「肇慶府」の統治者である「知府」から嶺西道に昇格しました)に序文を書いて頂くように依頼をしました。すべての原稿が印刷に入りましたが、最初の二頁目だけが序文を挿入するために保留状態でした。王泮氏は我々の『天主実録』を読んだ後、大変喜び、「良く書けている。理屈ももつともなもので納得できる」と言いましたが、更に「しかし、序文を書くことは難しい。それは他の誰も同じであろう。この書物にはどんな序文も必要ではなく、このまま人々に分け与えて良い」とも言いました。そこで、我々は彼にそして主に感謝しながら、この『天主実録』という書物によって、主の聖なる教えがこの(中国と言う)地に広まることを願いました。この書物の中では、中国の主要な宗教思想を弁駁し、すべての悪行と罪過に批判を加えました。このことについて我々がとても恐れていたのは、以前人々、特にその読書人(士大夫)層や官吏に配った際、これまでに彼らが聞いたこともなかった内容があったため、穏当でないという批評を得ることでした。嶺西道である王泮氏が我々の会堂を訪問しに来た際、往々にして毎回違う人たちと一緒にでしたが、我々の小さな邸宅とそこに置いている器物、書籍を観覧し、そのうち何冊かの『天

主実録』を持ち帰ることを望みました。彼らが敷地に入ろうとする時にはまず、小聖堂内にある救い主(キリスト)の像に向かって拝礼を行っていました。

これまでに約千冊の『天主実録』を配りました。この土地の人々が救いを得られるために行った活動はそれほど多くありませんが、現時点では些末な(面倒)事を避ける意味もあって、帰依したのは十二名のみです。中国人の多くは精進料理を食べており、肉や魚も食べません。ここには長年魚や肉食をせずに念仏に専念してきた老人がいますが、聖霊降臨の日(ペンテコステ。一五八五年六月九日)には、すべての書物と偶像を我々の所に持ってきて、焼却しました。彼ははつきりと「これまでの自分は間違っていた」と宣言しました。今は、天主聖經や聖母經、教会の要理(問答)などの学習に精励し、聖パウロの記念日(六月三〇日)に洗礼を受けました。このため、洗礼名はパウロです。二人目は聖母被昇天の日(八月一日)に洗礼を受けました。更にもう一人、重要な六十代の信徒がいますが、彼の息子とその妻、そして孫たちはみな一緒に受洗しました。私はこの善良な老人の洗礼名を「ニコラ」とし、彼は受洗後も引き続き教会での真理を聞くことを維持していました。最初の日、我々は彼が天主經と聖母經の意味を知りたいということに気づきました。彼は誰かから借りて『天主実録』を読んだのですが、惜しいことに理解が半端でした。神父様、お喜び下さい。我々が彼に「主のこと」について講義をしていた時、彼は感動して涙を流していました。彼やその他の入教を希望する人たちと共に、毎日曜(主日)のミサに参加していたのですが、彼らはヨーロッパのテヴェレ河(上)の三、四倍も川幅のある西江の対岸に住んでいるので、数十里の道を歩く必要があったにも関わらずに、です。

ある日、この老人は我々を彼の自宅に招待することを決意しました。当日、彼の到着が遅れたため、我々は他の用事で船に乗っていましたが、陸地からまだそう遠くないところにいました。彼は我々を見つづられずがっかりしていました。だが、その時突然にわか雨が降ってきて、彼が川べりまで走り寄ってきたところ、遠くから我々を発見し、両足を跪いて主に感謝をささげ、繰り返して地面に叩頭して、我々に彼の自宅に来ることを強く望みました。彼の自宅に着いた後、そこにはまるで親子が競い合うように多くの祭壇があるのを見つけ、彼らの信仰が真に敬虔であることを知ったのです。その後、彼らはかの地の田舎で取れたとても豊かな昼ご飯で我々をもてなしてくれました。しかし、(残念ながら)いくつかの料理は我々の口には合いませんでしたが、彼らの真心から出たもてなしでしたので、

我々は大変慰められました。更に我々を喜ばせたのは、その場に集まってくれた、彼の息子と娘を除く人たちが、義理の息子や孫などが皆、キリスト教の教え(要理)の学習に努め、受洗の準備をしていたことです。その老人は私に「全部で二十名あまりいます」と話してくれました。彼はその日に一族全員に洗礼を施すように求め、更には家の外にいる嫁いだ娘に聞こえるように大声で非難してこう言いました「今日、お前が洗礼を受けなければ、いつ、神父様たちはお前の家に来て洗礼を施す時間ができるというのだ」と。我々は彼を落ち着かせ、彼に「信仰に関する色々な問題に関する試験を通過した後でなければ、洗礼を受けることはできません」と伝えました。このことで彼らはますます一生懸命勉強し、その後、肇慶の教堂にやってきて、一家全員で受洗しました。

多くの人々がこの『天主実録』を求めてやってきて、そこに含まれる真理に理解を示しました。ある日、一人の武官がやってきましたが、彼は広東省の軍隊の首領であり、我々に対して大変礼儀正しく、中国人が一般的に地位のある人々に示す礼節でもある、我々の下座に座り、その上何度も、跪いて我々に教えを請うたのです。彼が行ったこの動作は、他の人間が彼の目の前ですることと全く同じでした。彼は、「自分は広東省に住んでいて、救いに関する教えを聞きたい」と言い、奉獻金として三、四元ほどを寄付してきました。もう一人はこの省の最高位の官吏で、彼は我々に「西方の聖人の教えを聞いてみたい」という書簡を送ってきました。彼が言うには、「昔、中国に伝わった(仏教)が、

今では腐敗堕落してしまっている」そうで、我々にはとても丁寧に接してくれました。このため、我々も『天主実録』一冊を彼に贈り、その返事の中に「この世界の救い主に関する教え、つまり「聖經(聖書)」はまだ中国語には翻訳されていないため、暫定的にこの「要理問答(である『天主実録』)」を贈ります。この中には教会の教えに関する教え、例えば「天主經」や「聖母經」などが少なからず含まれているので、その一端をうかがい知ることができると思っています。どうかご笑納ください」と書いて伝えました。

中国に近い「越南(ベトナム)」は、中国の属国なので、朝貢のための使節を送ってきます。ある日、その使節が我々の会院を訪れ、銀二両を奉獻し、お香も祭壇の上で灯してくれました。合わせて我々を称賛する詩も吟じてくれました。彼らが用いる文字は中国と全く同じものでした。彼らは『天主実録』を北京までの朝貢に携帯し、その後は祖国にも持って帰り、人々に読んでもらうようです。

神父様。ご存じでしょうか。我々の会院にどれだけ多くの読書人(士大夫層)

や高級官僚、貴族が参観にやってくるかを。我々の友人であり庇護者でもある嶺西道尹であった王泮氏が広東省と江西省などを治める提督に昇任したことにより、彼が関係を持つ多くの要人も、我々を訪問しに来ます。我々の「西洋式邸宅」は、中国における「珍奇な風景の一つ」であり、そこにあるどんなものも、例えばドアや窓、スプーン、物入れ、そして建物全体と我々自身が彼らにとつては「すべて新奇なもの」と映るようです。我々もまた、訪問してくる全ての人々、高級官僚や貴族など地位のある人は無論、貧しい人々にも礼儀を持って接待しています。

外国人だからといって警戒心を持たず、とても親切にしてくれる人がたくさんいます。とても多くの人が、我々(西洋人)は、彼ら(中国人)とほとんど異なるところがない、と言ってくれますが、中には、傲慢でプライドが高い人も少なからずいます。我々は法律を除いては、彼らすべてに謙譲の姿勢を示しています。彼らもまた、彼ら自身に我々より良い点がない場合は、我々に謙譲の姿勢を示してくれます。

中国の宗教思想については、あまり紙幅を浪費したくありませんので、簡単に述べます。上層社会に属する人々はみな「エピキュロス派(享楽主義者)」のようで、名称的には異なりますが、法律上や世論上から見れば、その理解は的確だと思えます。下層社会に属する人々は靈魂の不死不滅などを認めているようですので「ピタゴラス派」に属していると言えます。それは彼らが、肉や魚を食べるともう一つの(死後の)世界で禽獣に生まれ変わってしまう、また禽獣が人間に生まれ変わるといふ輪廻(転生)を信じているからです。これらの思想はかなり早い時期(の大昔)に中国に伝来したようですが、はっきりいつなのかは調査すべき史料もないため、分かりません。しかしこれらの教えが、中国で崇拜され、名前と形を持って、中国人に畏怖されている悪魔(魔鬼)の仕業であることは全く疑いようがありません。

今年もまた、少なくとも困難に襲われました。しかし、いつも主が我々をお救い下さいました。そのような中で我々が最も心配しているのは、この国の皇帝が発出した一つの詔勅です。それには「中国に布教活動に来た神父は、山賊や盗賊よりも更に悪人であり、放蕩な生活を送っている」とあります。これらの人間は元々他の省で生まれた山賊や盗賊なのですが、頭髪を剃って、僧侶のふりをし、他の省にやってくるのです。そして、お金を使っていくつかの寺院を建て、自分

たちで管理していることが分かり、この寺院の在る場所を通るお金持ちはみなお金を奪われ殺されており、彼らの悪行はとどまるところを知りません。端的にこれらの寺院は、人殺しと盗人の巢窟であると言えるのです。彼らはある寺院に拠点を構え、他の新しく建設された寺院に指示を出し、悪事の限りを尽くします。もし、彼らの許しを得ずに勝手に行動する領袖がいれば、彼らは髪の毛を伸ばされ、領袖の地位をはく奪され還俗させられます。以前、二回ほど地方官吏に皇帝の詔勅を見せてもらうことがありました。私たちが最も心配したのは、嶺西道尹である王泮氏が使用人をよこして我々に、彼自らが書き贈ってくれた、字体も美しい「僊化寺」という寺院の扁額を外す、と告げさせたことです。このことについては既に昨年の五月三十日に、ルッジャー神父が報告していると思います。

主に感謝します。皇帝から、一つ目の詔勅を取り消す二つ目の詔勅が発出されました。これは皇后が、皇帝が最初の詔勅を実行することを望まなかったためだそうです。私は、このことは「聖母マリア」が、この巨大な中国にわずかに存在する我々の会堂が没収されることを望まなかったからであると、深く信じています。このことで、嶺西道尹である王泮氏は我々に「即刻、僊化寺の扁額を再掲示するように」と言いつけました。神父、お分かりになりますでしょうか。どれだけの人々が我々を目の敵にしたり反対し、またキリスト教会を敵視しているのか。一つの良くない事例によって、その他の幾千幾万の同類の者が、彼らが伴っている召使いと共に、皆処罰を受けているのです。

昨年、我々は管区長であるヴァリニャーノ神父に手紙を送り、この会堂がとても平穩であることを報告しました。三つの省で行われる(科挙の)会試も既に終わり、それらに合格した人々は上司の指示に従い、それぞれの任地に赴きました。まるで(マタイの福音書(二〇・一)にある)「ブドウ園の農夫のたとえ」のようです。今年の八月には、ポルトガル出身の二人の神父が到着しました。一人はデュアルテ・サンデ神父、もう一人はアントニオ・アルメイダ神父です。サンデ神父は年齢を重ねた債特豊かな方で、本教区の最高位を任され、アルメイダ神父を伴として来られたのです。彼らを中国の内地に入らせるにはかなりの手間がかかりました。中国官府の許可を得ようとしていましたが、残念ながら二度も拒否されました。一度は嶺西道尹である王泮氏に、もう一度は肇慶知府である鄭一麟に、です。最終的には、主の祝福にあずかって、二人とも前後して中国の内地に入る事ができました。しかしながら、彼らに許されたのは我々に会うことだ

けで、ここに留まることは許可されなかったもので、またマカオへ引き返すことになりました。そこで私たちは嶺西道尹である王泮氏自身に次のように上書しました。「サンデ神父は我々の親族であり、兄弟よりも絆は深く、彼は我々に会うために三年もかけて海を渡ってきました。今、ヨーロッパに戻る船もありませんので、あなた様には特に彼が我々と長くこの地に留まる許可を頂きたいのです」と。知府はこの内容に不満であったため、彼が許可したのは二か月だけの滞在でした。アルメイダ神父に対しても許可したのは船を待つ一定期間のみでした。

中国明王朝の一つの習慣として、高位にある官吏は、三年に一度、北京にいる皇帝陛下に拝謁しなければなりません。今年はまだその年です。総督と知府は年の初めから、どの様にして北京に行くことが適切なかの協議を重ねていました。ある日、彼らはいつもと同じように我々の会堂に来訪しました。ルッジエーリ神父は、この機会を活かそうと、彼らと一緒に連れて行ってくださるよう頼みました。王泮氏と一緒に来た伴の高官たちと意見を交換し、その場で承諾してくれました。何日かたつて、またルッジエーリ神父が北京行きのことを話題にした時、嶺西道尹からルッジエーリ神父に「私が一緒に連れて行けるのは浙江省と湖広省の所までで、この二つの省は南京からも遠くないので、自分たちで行っても良い」と告げられました。ただ、この年は北京と南京に行くのは時宜を得ていませんでした。それは、この頃、西洋人を帯同して中国に入った官吏が、「封疆大員(明代の都指揮使)」でしたが、刑事罰を受けていたからです。ルッジエーリ神父はそこでまずは上述の二つの省に行つて見物をすることに決めました。ルッジエーリ神父が先に広州に行つてアルメイダ神父の到着を待ち、合流してから彼を伴つて旅行することにしました。

これについては、既に彼らが神父様に報告していることと信じます。この旅行ではどこかに新しい会堂を建設できないかと探したため、三ヶ月を要しました。毎年二回、広州では商売の市が立ちましたが、この取引の際にはアルメイダ神父はポルトガル商人と一緒にだったので、比較的安全にやることができました。我々は既にインドにいらつしやる、管区長であるヴァリニャーノ神父に助手を派遣して頂くよう手紙を送りました。それは、我々には多くの計画があり、また他の地方の民衆にも奉仕するためです。

神父様、我々には助手が必要です。そして愛情と忍耐心に富んだ人で初めて務まります。中国ではその二つの徳がとても重要視されるのですが、私にはそれ

が欠けているのです。

肇慶にある私達の建物は素晴らしい場所にあり、瞬く間に有名になりました。我々が持つている様々な器物、例えば、三菱鏡や聖なる像などに物珍しさを感じない人はおらず、また小さくて精巧な物入れには、大きくはないですが、多くの人の興味を引くため、とても遠い土地から見に来ます。もし、神父様が我々に何か物を送ってくださるのであれば、首に掛けられる小さな時計をお願いします。反対に、キリストの苦難に関する聖像の類は不要です。彼らにはその意味がまだ理解できないからです。しかしそれ故、我々にとっては主に奉仕する最高の道具となります。

主の恩寵のおかげで、私は健康です。今はもう通訳を通さずに直接、中国人とどんなことでも話せますし、漢字を用いて書いたり読みあたりできているのでとても意を強くしています。喜んでいただけますか。今、私はあなたたちに『中国の簡単な紹介』という本を送ろうと思っています。ただ、まだ中国の首都で皇帝のいる北京が、北方のどこにあるのかなどの経緯度はわかっていません。この書物には北京や工程に関する地図が多く含まれていて、それらは非常に詳細に描かれてはいますが、残念ながら経緯度が記入されていません。

昨年、私は神父様に中国語での説明を付した世界地図を送りました。これは王泮氏が両広総督であった頃、彼の邸宅で印刷されたものです。この中には誤りもありましたが、中国人がこの種の世界地図を見るのは初めてだったと思います。私は同じような世界地図を三枚描きましたが、すべてに中国語での解説を付し、一つは当時知府だった王泮氏に、一つは広東省の兵備道に、一つはある文人に贈りました。今現在、更に別のもう一枚を作成中です。これには極力詳細な情報を描きこもうと思っていますが、残念ながら参考にできる書物がここにはありません。そうはいっても、彼らが持つている者よりはるかに良いものだと思います。私はこのような些末なことに忙殺されていますが、もっと大切なことは他人に任せています。

ここでの仕事が長くできることを願っていますが、私には少なくない欠点があるのです。それでも、ここに長くどまり業務できることを願っています。神父様。主の愛があなたの神聖な祈りと聖なる祭りによって、私を恵み、このきわめて重要な布教区の助けとならんことを願います。そして、この地球上すべての同志が私のために祈り、あなたの祝福にあずからんことを祈ります。

あなたの主と共にある不肖の弟子 マテオ・リッチ

【中国語・原文】

六、致羅馬總會長阿桂委瓦神父書

一五八五年十月二十日 撰於肇慶會院

耶穌 瑪利亞

在基督內極可敬的神父：

願基督的平安常充滿我們心靈！

如同去年一樣、我本決定不給您写信、報告我們在中国所建造房舍等事、而讓省會長范礼安神父給您報告、因為我們不時給他去信、然後他再轉告給您。目前我獲知幾天後、將有船隻開往麻六甲、且在歐洲船隻開回葡萄牙前到達、假使我的信能趕上這條船的話、這樣不到一年、您便可收到有閩印度傳教区的消息。否則就只有聽天由命了。

去年您知道我們有幸承蒙澳門會院院長加布拉列神父視察我們這座省會院、因為我們是澳門會院管轄。加院長對我們非常滿意、我們由他良好的談話獲益匪淺、尤其在歸化外教人方面。他在這方面經驗豐富、因為他曾在日本傳教多年。我們曾特請他給我們兩位甚有希望的望教者之一施洗、為此還慶祝一番。我們曾給您寄一本中文「天主實錄」、伴同中文天主經、聖母經和十誡、希望您會感到滿意。

在中國有一種習俗、凡出版一本新書、要請地方官吏或社會名流撰一序言、對作者恭維一下、對其內容也褒獎一番、這和歐洲一模一樣。所以我們便請嶺西道王泮撰写、他是我們這裏的保護者、去年自肇慶知府升任嶺西道。一切印妥、只缺首頁、便是將印序言而保留的。他看了我們的「天主實錄」後、非常高興說：「写得不錯、理由也充足、但他稱不能撰写序言、似乎別人也不能撰写。並謂它不需要什麼序言、就這樣分送給百姓者即可。因此我們感謝他、也感謝天主、希望這本「天主實錄」能使天主的聖教在這塊土地上傳播。在其中我們曾辯駁中國主要的宗教思想、也對中國所有的種種惡行與罪愆加以斥責。對此我們原非常害怕、曾把它分給給百姓、尤其說書人與官吏、直到今天尚未聽聞有人批評其中有不妥處。當嶺西道尹來會院拜訪我們時、也往往帶別人一塊來、參觀我們的房舍與其中的器物、書籍、曾要幾本「天主實錄」回去。他和同行的人一進門、先向我們小聖堂中的救主像行礼。

我們迄今發出去的「天主實錄」約有一千冊。我們為這塊土地上的得救所做

魚皆不食。這裏有一人多年吃齋念仏、在聖神降臨那一天（一五八五年六月九日）、把他所有的書籍與偶像一塊交給我們焚燒。他聲明自己過去錯了。如今勤謹學習天主經、聖母經及教会的要理、在聖保祿記念日（六月三十日）這天受洗、故取聖名保祿。第二位是在聖母升天日領的洗。還有一位重要的教友年六十許、和他的兒子、兒媳及孫兒一起受了洗。我們為這位善良的老人取聖名為尼各老、他仍堅持要繼續聽教会的道理。第二天我們便發現他希望知道天主經與聖母經的意義、有人借他「天主實錄」看、可惜他只懂一半。神父！您應當很高興、當我們給他講解天主的事情時、他感動得流淚。他和其他望教者在主日來望彌撒、要走幾十里路、住在西江對岸、這條西江要比台伯河寬三、四倍。

一天這位老人決定請我們到家裏。因為他來遲了、當時我們為其它的事正船上、但距陸地不遠。他因找不到我們而頹喪、忽然驟雨來襲、他便跑到江邊、遠遠看見我們、便双膝跪地感謝天主、連連叩首至地、又強請我們到他家去。到後、發現他家有許多祭台、好像父子比賽似的、由此可以看出它們真虔誠啊！後來以鄉下豐盛的午飯招待我們、雖然有些菜不合我們的口味、但由於出自他的誠意、因此我們感到非常快樂。使我們更高興的是他家集滿了人、除了他的兒子、女兒外、尚有女婿、外孫等、都勤謹學習要理、準備接受洗礼。老先生告訴我計二十余口。他請求當天給他們全家付洗、還大声斥責他已出嫁的女兒、當時在門外、說：「今天你如不受洗、什麼時候神父有空能到你家給你付洗啊！」我們便安慰他、勸他說在沒有對信仰種種問題考驗通過後是不能受洗的。因此他們更加緊學習、後來一天來到肇慶聖堂裏、全家都受了洗。

很多人來要這冊「天主實錄」、對其中的道理也多明白了。一天來了一位武官、他是廣東軍隊首領、對我們非常有禮、坐在我們下面、這是中國人在有地位的人前應有的禮節、還不時跪地向我們請教：他所做的正是別人在他面前該當做的。他謂：本人住在廣州、願聽有關得救的道理。臨行還捐三、四塊錢、作為獻儀。另一位是該省最高的官吏、他致書給我們、願聽聽西方「聖人」的道理。他謂古時曾傳入中國、但目前腐敗落伍了、對我們也非常客氣有禮：因此我們給他寄了一本「天主實錄」、並回信告訴他世界救主的教義——聖教尚未譯為中文、因此暫寄給他這冊「要理問答」、其中包括不少有關教会的道理、天主經與聖母經等、可以窺知一、二、敬請笑納。

靠近中國的越南為中國的藩屬、曾派使節來華進貢。一日來會院訪問我們、並奉獻銀兩、也獻香以便在祭台上点燃、並吟詩稱揚我們、所用的字体完全是中國的。

臨行帶走不少「天主實錄」，以便帶到北京與他們的祖國，呈人閱覽。

神父！您不知每天有多少讀書人與顯貴來我們會院參觀。因為嶺西道尹王泮為廣東與江西等省的總督，他是我們的朋友與恩人，由於他的關係不少要人也來訪問我們。我們西式房舍便是中國奇景之一，因為我們的任何東西，如門、窗、鑰匙、箱子、整個房屋和我們本人，為他們都是新奇的，我們也以禮接待所有來訪問的人，尤其顯貴和有地位的人，但對窮人也是彬彬有禮。

有不少人對我們非常好，並不因為我們是外國人而有戒心。許多人都說我們幾乎和他們沒有兩樣，然而，在那裏也有不少驕矜孤傲之人。我們除了法律外，對他們都表示謙讓，他們也承認自己沒有什麼較好的東西，因此對我們也表示謙讓。

我不願就中國的宗教思想浪費太多的紙張。簡單的說：上層社會人士皆為尹比鳩魯享樂派，並非在名稱上如此，而是在法律與輿論上的確如此。下層社會之人承認靈魂不死不滅，他們是屬於畢達哥拉斯派，因為他們相信輪迴，担心吃肉吃魚，人在另一世界變成禽獸，或禽獸會變成人之故。這種思想很早來到中國。但究竟何時來到，已無典籍可查了。這一切毫無疑問地源於魔鬼，這在中國甚受崇拜禮敬，而且都有名號與形象，中國人對之又敬又畏。

今年也遭受不少困難，但每次天主都解救了我。不過我們最担心的是中國皇帝的一道勅令，言：獲得報告在中國傳教的神父都是些較土匪強盜還壞之人，生活放蕩。原來是有些土匪強盜生在一省，剃掉頭髮化作僧人，來到它省，用金錢修建幾座寺院，並由自己掌管。凡經過那裡的有錢之人，都被他們洗劫殺戮，無惡不為，所以他們的寺廟簡直是殺人劫貨者的巢穴。他坐鎮在一所寺院，指揮其它新建的寺院，為非作歹，凡沒有獲得准許的主持，擅自行動的話，便讓他們把頭髮留下，剝脫他們主持的地位，讓他們還俗。曾有兩次地方官讓我們看皇帝的勅令，但讓我們最担心的是嶺西道尹——王泮，他打發傭人對我們說，把他所贈送的「僊花寺」扁額摘下，字体勁秀，還是他親筆所書寫的。這是去年羅明堅神父於五月三十日所報告過的。

感謝天主，祂藉皇帝的第二道勅令，取消了首道勅令，據說是皇后不願皇帝執行首道勅令之故。我深信這是聖母不願在這龐大中國僅有的會院遭到沒收。因此嶺西道尹又叫我們趕快把那塊「僊花寺」扁額再掛上去。神父！您看！多少我們人間仇敵反對我們，仇視天主教會。由於一個表現不佳，便把其他同類的幾千幾萬人伴同他們的僕人一起遭受處分。

去年我們曾給省會長范礼安神父去信，告訴他這座會院很平安，三省會試已過，

因此凡上榜的各按上司所指定的地方赴任，於是「打發工人到他葡萄園中工作去了」（マタイ福音書・20：1）。今年八月來了兩位葡萄牙籍神父，即孟三德神父和麥安東神父。前者為老神父才有德，被委為本傳教區的最高上司，麥安東神父作伴。為能讓他們進入中國內地，頗費了一番周折。希望由中國官府獲得批准，可惜兩次皆遭拒絕。一次是嶺西道尹王泮，一次是肇慶知府鄭一麟。但最後蒙天主的祝福，兩位先後都進入了內陸，不過只准來看望我們，不可居留，仍應返回澳門。我們給嶺西道尹本人上書謂：孟三德神父是我們的親屬，較兄弟還親，他為來看望我們，曾航行三年，目前無船隻回歐，因此請大人特准他長期和我們住在一起。知府對此說詞並不滿意，只准他在這裏停居兩個月，對麥安東神父的批准還應等候一段時期。

在中國明朝有一個習俗，每三年高官大吏必赴北京覲見皇帝一次。今年正是面聖之年。總督與知府們年初便商量如何赴北京事宜。一天他們如往常一樣，又來到會院訪問我們。羅明堅神父趁機要求把他帶到北京一遊。王泮和陪他一起來的要員交換了意見，滿口答應。過些時日羅明堅神父又談北上的問題時，嶺西道尹對他說，只能帶他到浙江與湖廣兩省，這兩省距南京不遠，或由他自己去皆可。但這年尚不宜去北京和南京。因為當時帶洋人進入中國，雖然是封疆大員也會被判刑治罪的。羅神父於是決定先去上述兩省看一下，先到廣州等候麥安東神父的到來，以作他旅遊的同伴。

我相信他們會写信給您報告，這次旅行需三個月希望能在那些地方建立新會院。每年兩次在廣州舉行商展，藉此商展讓麥神父跟葡籍商人一塊前來比較安全。我們已致書印度，要省會長范礼安神父派助手前來，因為我們有很多計畫，要為其它地方的民衆服務。

神父！我們仍需要助手，但應是富有愛心與耐心之人才行，因為在中國非常重視這兩種德行，這正是我所缺少的修養。

在肇慶我們座房舍的位置非常優越，很快名聞遐邇。我們許多東西他們無不感到新奇，如三菱鏡、聖像等，還有一個小巧玲瓏的盒子，雖然不大，却吸引許多人從很遠的地方來參觀。因此假使您給我們再送來一些什物，如小型鐘錶，可以掛在頸上的：至論聖像不要寄有關基督苦難之類的，因為目前他們尚不能瞭解。這為我却事奉天主的最好工具。

托天主聖寵之助，我身體健康，目前已可不用翻譯，直接和任何中國人交談，用中文書寫和誦讀也差強人意。因此您高興吧！我希望給您們寄去一本「中國簡介」。只是目前尚不知北京在中國北方的經緯度，它是中國的京都，皇帝住在那裏。因此

在書中找到不少有関它的地図、繪得也非常詳細。可惜沒有經緯度。

去年我給您寄去一張用中文講解的世界地圖、是兩廣總督王泮在他官邸親自督印的：雖然其中不無錯誤、但為中國人還是第一遭看見這類作品。

我繪了三張相似的世界地圖、全部用中文講解、一張贈送給知府王泮、一張贈廣東省兵備道、一張贈給一位文人。目前我正在繪另外一張、要尽力繪詳細些、可惜此處沒有書籍可供參考。但無論如何、總比他們所有的要好的多。我正忙於這些瑣碎之事、而把重要的事留給別人去做。

我希望能在這裏長期工作、但我有缺點、而且還不少；但我的確願意長期留在這裏服務。神父！請您看天主的愛上、以您神聖的祈禱與聖祭幫助我、幫助這個極為重要的傳教區。並請地球這边的全体会友以祈禱來幫助我。請您神聖的祝福。

您的在主內不肖弟子 利瑪竇 敬書
一五八五年十月二十日 撰於肇慶會院

(1) 本書簡については、平川祐弘氏『マツテオ・リツチ伝1』(東洋文庫141、平凡社、1969年)の94頁などに断片的ではあるが言及があるので参照されたい。「テーヴェレ(テベレ)河」はローマを通るイタリアで三番目に長く、また流域面積はイタリアで二番目の大河を指す。

【付論】

前稿末尾でも私見を述べたが、その続稿としてその後の状況を略述しておきたい。前稿では、「ローマ教皇庁」が、中国政府管轄下組織である「中国天主教愛国会」によって選任された「司教」について、従来「破門状態」にあった状況から「回復させる」ことを「暫定合意」した、という内容を示した。その後、香港での民主化運動などの混乱もあり、中国政府の「人権」に対する取り扱いへの国際的圧力も高まったことから、ローマ教皇庁の判断が注視されていたが、2020年11月1日付けの「カトリック新聞」では、中国との当該(司教任命権に関する)「暫定合意」を「延長する」と発表されている。同紙上では2018年9月の教皇フランシスコの談話として、「暫定合意で想定されているのは司教候補についての対話です。司教任命の手続きは対話を通して行われます。ただし任命はローマによって行われます。教皇が任命するのです。このことは明白です。そして私たちは、このことを理解してくれない人たちが、長年にわたり地下活動を強

いられている多くの信者のために祈ります」という説明を紹介しており、秘跡の一つである「司教任命権(叙階)」はあくまでもローマ教皇に帰属すること、地下活動を行っている信者への祈りという配慮を示している。

これらローマ教皇庁の表明に対する中国政府の公式な反応については、知悉していないが、中国天主教愛国会及び中国天主教主教団が発行している機関誌である『中国天主教』でも、2018年9月のローマ教皇庁の談話については特に言及が見られない。しかしこのローマ教皇庁の談話直後にあたる『中国天主教』第5号(10月)の巻頭には「10月3日から28日までの間、バチカンで挙行された世界キリスト教主教会議に参加した」(中国天主教代表团出席世界天主教主教会議)ことが縷々述べられている。この号ではまた、「推進我国天主教堅持中国化方向五年工作規画」と題された文章もあり、ここでは「第二バチカン公会議で示された各国キリスト今日の現地化」を踏まえて、「中国における社会主義とキリスト教徒の適応(融合)」など、詳細な「キリスト教の中国化」に向けた取り組みが紹介されている。この流れは第6号(12月)でも同様に「天主教中国化的新起点―紀念中国天主教自選自聖主教60周年座談会在寧隆重舉行」(周太良・4頁)という文章で「1958年に漢口、武昌教区において、董光清、袁文華の両神父が「主教」に任ぜられ、【外部(＝教皇庁)の妨害を除外しながら】聖なる秘跡を祝う典礼が舉行された。中国天主教会が自らによって主教を選聖することはここに始まる。このことは中国天主教会史上、シンボリックな意義を有する重大な出来事であった。更に、中国天主教会の「独立した自主自弁」的な教会事業の推進と、「天主教在中国」から「中国天主教」への根本的变化を実現することに対して大きな力を与えた」とし、ここでも「脱ローマ教皇庁」化を目指していることが看取できる。この文章で頻繁に出てくるのは「天主教中国化」「愛国愛教」であり、「国への愛(貢献・奉仕)」が優先する」というロジックが明確になっている。

この流れの延長線上に2019年に入ってから以降、同雑誌において「中華人民共和國成立70周年を祝う特別号(中国天主教慶祝新中国成立70周年紀念專輯)」(2019年9月増刊)が発行されるなど、2021年の「中国共産党成立100周年」まで「政府色(国・中国共産党)」が更に強調されるようになる。これら2019年以降の「中国における宗教を取り巻く環境」については、次稿の課題としたい。